

音形の有無が項の認可に与える影響*

——ゼロ代名詞と削除——

田川 拓海

キーワード：音形、項、ゼロ代名詞、削除、右方節点繰上げ（RNR）

要 旨

生成統語論の研究において、日本語によく見られる音形を持たない名詞句（ゼロ代名詞）の項としての性質は、音形を持つ名詞句と基本的には変わらないと考えられてきた。それに対し本論文では、少なくとも 1) 状態のタ節、2) 「-方」名詞句という独立した 2 つの文法環境においてゼロ代名詞は可能だが音形を伴った名詞句の出現が許されないケースがあることを示す。さらに、現代日本語（共通語）における右方節点繰上げ構文の基本的な特徴について記述・整理を行い、この環境におけるガ／ノ交替も音形の有無により容認度が異なる現象の 1 つである可能性を指摘する。

1. はじめに

本論文では、項の音形の有無が文法性に影響する事例をいくつか取り上げ、それぞれの現象の性質を観察・記述し、さらにそれらが理論的にどのような問題につながるのか整理する。

一般的に項名詞句がゼロ代名詞（いわゆる *pro*）として現れる場合、格および θ 役割が与えられれば基本的に音形を伴う名詞句と変わりがないと考えられている。すなわ

* 本論文は、筑波大学人文社会系プロジェクト「項および格の統語的分布・形態的具現に関する形式的研究」主催のワークショップ「項と格の具現への形式的アプローチ」（2014年3月7日、筑波大学）をもとにしている。発表およびその前後に石田尊氏、依田悠介氏から重要なご指摘をいただいた。記して感謝したい。本論文における不備や誤りはすべて筆者の責任である。

ち、**pro** は生起可能だが音形を伴う名詞句は不可能、という文法環境については管見の限りこれまであまり取り上げられてこなかった。

- (1) a. 太郎は次郎を見かけなかった。
b. 花子も 次郎を／彼を／**pro** 見かけなかった¹。

本論文では、そのような文法環境に該当する可能性のある現象をいくつか指摘する。これは統語部門と形態・音韻部門（いわゆる PF）の関係について新たな問題を提起するものである。

2. 状態のタ節

まず一つ目の環境として、状態のタ節を取り上げる。

現代日本語（共通語）には、(2)に示すようないわゆる結果相のテイルと（ほぼ）交替可能な「状態」あるいは「形容詞的用法」と言われるタがある（寺村 (1984)、金水 (1994)、Abe (1993)など）。

- (2) a. 濡れたタオル \equiv 濡れているタオル
b. タオルが濡れた \neq タオルが濡れている

(3) a. 青い目をした太郎 \equiv 青い目をしている太郎
b. 太郎は青い目を している／*した²。

(3a, b)の対比に見られるように、述定用法ではテイル形のみが可能でタ形が不可能な「青い目をしている」という表現もこの種の連体節内では可能になることから、テイルの縮約であると見なされることもある（寺村 (1984)）。

この状態のタ節には意味的にも統語的にもいくつか興味深い性質が報告されているが、その一つに外項の存在を許さないという性質がある。動作主が生起不可能であることは金水 (1994)、Abe (1993)などで早くから指摘されてきたが、状態の解釈とは相性

¹ 「花子も（次郎を）見かけなかった」という表面形だけであれば、動詞句削除の可能性も存在する（Otani and Whitman (1991), cf. Hoji (1998)）。

² 太郎が意図的に目を青く変化させた、というような解釈であれば容認される。

が悪くなさそうな、いわゆる「経験者」の外項についても生起が難しいことが田川 (2010b)によって明らかにされている。

- (4) a. その女性がプログラミングの能力に *優れた／優れている（こと）
b. プログラミングの能力に 優れた／優れている 女性
c. その女性が *優れた／優れている プログラミングの能力
d. pro 優れた／優れている プログラミングの能力

（田川 (2010b): 195, pro の追加は筆者による）

「優れ（る）」はいわゆる第四種の動詞であり、述定用法ではタ形をとれないが（(4a)）、連体節では形容詞的用法のタによってタ形も可能になる（(4b)）。さらに、「能力の持ち主」を表す外項である「その女性が」を連体節内に残すことが、テイルでは可能であるのに対して、タでは容認度が落ちる（(4c)）。ここで重要なのは、外項を表面的に具現化しなければタ／テイル両方とも可能になる（(4d)）ということである。

田川 (2010b)では状態のタ節では「外項を認可する統語的位置の欠落」があるという指摘がなされているが、なぜ音形がない場合は可能になるのかという点については具体的な解決案が示されていない。ここで経験者項が pro であるとすれば、音形がある場合と文法性に差が出ないことが予測されるが実際にはそうなっていない。(4d)のような環境であれば、経験者項は任意の解釈を受ける要素（ PRO_{amb} ）だとすることが可能かもしれないが、この経験者項に当たる空範疇は(5)に示すように特定の個体と同一指示関係を持つこともできる。

- (5) その女性_iは [_{ei} 優れた]_iプログラミングの能力を持っている。

また、たとえこの空範疇が PRO_{amb} だとしても、日本語で音形のある名詞句と交替できない PRO の取り扱いを明確にする必要がある。

3. 「-方」名詞句

次に、二つ目の環境として「-方」名詞句を取り上げる。

名詞化接辞「-方」は、動詞句を名詞化し、様態や方法を表すと言われている（伊藤・杉岡(2002)）。

- (6) a. 様態：雨の降り方、医療費の増え方
b. 方法：野菜の作り方、自動車保険の選び方

(伊藤・杉岡(2002): 103-104)

この名詞句内では項は全て「の」でマークされることになるが、他動詞使役文を「-方」名詞化した際に被使役主の格の現れ方が問題となることが田川(2010a)によって指摘されている。

まず(7)に示すように、現代日本語では「にの」という格マーカーの連鎖が許されないために「に」に「の」が後接する場合は「への」という形式が現れる。

- (7) a. 太郎が花子にプレゼントをあげた。
b. 太郎の花子 *にの／への プレゼントのあげ方

(田川(2010a): 127)

ここで他動詞二使役を「-方」名詞化した場合について見てみる。

- (8) a. 太郎が 花子に／*を りんごを食べさせた。
b. さっきの太郎の花子へのりんごの食べさせ方。

(田川(2010a): 127)

ここでは一見、二使役の場合の被使役者も「へ（の）」で置き換えられるように見える。しかし、(8)のような場合の「花子」は意味役割で言えば目標 (Goal)のような性質を持つため「への」での標示が許されている可能性がある (Matsumoto (2000))。そこで、モノの移動を含まない出来事を用いて二使役文を「方」名詞句にしてみると(9a, c)に示すように自動詞・他動詞どちらの場合でも被使役主を「への」でマークすることはできない。

- (9) a. *さっきの太郎の花子への帰らせ方
b. 太郎が助手に学生をほめさせた。

c. *さっきの太郎の助手への学生のほめさせ方

（田川 (2010a): 127）

これは、補語である名詞句がいずれの格をもっても認可されず、名詞句自体が音声的に具現化されない例ではないかと考えられる。

ここで興味深いのは、(10)のように名詞句を表面的に出さなければ容認度が改善されるということである。

(10) さっきの太郎の *pro* 寿司の食べさせ方

（田川 (2010a): 128）

これもやはり項である名詞句の音形がある場合とない場合で容認度に差がある例であり、一般的なゼロ代名詞の性質からは予測されない。現段階では明確な分析を与えることはできないが、格に対応する形態的な具現形（形態格）がないことから名詞句自体の具現も妨げられているのではないかと推測される。

4. 削除と項の認可

以上、全く異なる二つの環境において名詞句の音形がない場合とある場合で容認度に差が出る場合があることを示した。本節では、この問題を考える際のさらなる手がかりの一つとして、削除現象に関する論点のまとめと現象の整理を行う。

4.1 Island repair

生成統語論研究では、*syntax-PF interface* のトピックの 1 つとして“*island repair*”についての研究が蓄積されてきた。現象の指摘は Ross (1967) に始まるが、2000 年代以降もたびたび取り上げられている (Merchant (2001), Nakao (2009) など)。*island repair* とは、簡単に述べると音形が現れないことによっていわゆる島 (*island*) の制約等に関する文法性違反が回避される現象のことである。以下、スルーシングの例を挙げる³。まず、スルーシングとは(11)に示すような削除現象である。

³ 以下、取り消し線は削除されている箇所を示す。

(11) スルーシング (slucing)

John met someone, but I don't know who ~~John met~~.

(12)では、等位構造中の一方からのみの *wh* 句の抜き出しが許されないために起こる容認度の低下 ((12a)) がスルーシングで問題のある箇所が削除されることによって回避されている ((12b))。

(12) 等位構造制約 (Coordinate Structure Constraint)の違反とその回避

a. *Irv and someone were dancing together,

but I don't know who_i [Irv and t_i] were dancing together.

b. Irv and someone were dancing together,

but I don't know who_i ~~[Irv and t_i] were dancing together~~.

(Nakao (2009): 4)

項／名詞句ではなく句の削除という違いはあるが、*island repair* も音形がなくなることにより容認度が上がる現象であり、本稿で取り上げた現象を分析する上で一つの手がかりになるのではないかと考えられる。

4.2 日本語の右方節点繰上げ (RNR)

ここでは、上述した *island repair* と同じような役割を持たせることができる現象として、現代日本語（共通語）における右方節点繰上げ (Right Node Raising: RNR)構文と名詞句、特に項／格の関係について見る。

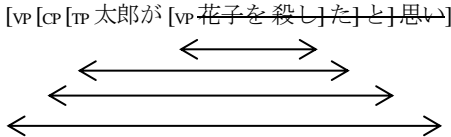
日本語の RNR ((13a)のような現象) については生成統語論においてそれほど研究が盛んであるとは言いが、基本的に(13b-d)のような特徴を持っている⁴。

(13) 日本語の RNR とその特徴

a. 太郎はりんごが~~好きで~~、花子はなしが好きだ。

⁴ 日本語ではその語順の特性から、常に前件の述語を含む部分を削除することが多い。この場合音声化されていない部分の形態（活用形）を決定するのは非常に困難である。本論文では基本的に連用形に統一するが、削除されていない文との比較等の都合上テ形を用いることもある。

- b. 等位接続の前件にしか適用できない⁵。
 b'. *太郎はりんごが好きで、花子はなしが好きだ。
 c. 等位接続の前件の右端にしか適用できない（medial deletion はできない）⁶。
 d. 端であれば、構成素を成していなくても削除できる。
 d'. 太郎は次郎が~~花子を殺した~~と思い、次郎は太郎が花子を殺したと思った。



(13d)については、構成素しか削除できないのであればその対象は上記のどれかの矢印の範囲（すなわち、VP, CP, TP, 埋め込み節の VP）に限られるはずであるが、実際には構成素構造をこえた削除が可能になっているということである。ここから、日本語の RNR（の少なくとも一部）は PF 削除によって分析できる可能性が高いと考えられる（cf. Yatabe (2012)）。

このような性質を踏まえると、RNR を様々な環境に適用することによって island repair と同じような現象が発見できるのではないかという予測が出てくる。RNR では削除部分と同じ要素が後件に現れなければならない（前件の）削除部分のみが文法性の悪いケースは限られてくるが、下記のような格交替はその候補の 1 つとして考えられる。

(14) ガ／ノ交替における Complementizer Blocking Effect

- a. 将来大地震 の／が 起きる可能性
 b. 将来大地震 *の／が 起きるという可能性

(Hiraiwa (2001): 100)

⁵ 英語やドイツ語の VP-ellipsis, NP-ellipsis, Sluicing などの削除現象では前件・後件どちらにも適用できることが知られている（Wilder (1997)）。

⁶ Ha (2008)は韓国語の RNR においては(3a)のタイプのような前件の右端以外の要素に対する削除が許されると記述している。

a) Bill-i <ku-chayk-ul> sse-ess-ko, Mary-ka ku chayk-ul caymiisske ilk-ess-ta.
 B-TOP the book-ACC wrote-CONJ M-TOP the book-ACC joyfully read-PAST-DEC.
 'Bill wrote the book, and Mary enjoyed reading the book.'

(Ha (2008): 13)

(14)に示すように、ガ／ノ交替は補文化辞 (complementizer) 「という」の介在によって妨げられることが知られている。さらに、RNR と組み合わせた次のような対比を見てみよう。

(15) Complementizer Blocking Effect と RNR

- a. 太郎は大地震の起きる可能性に言及し、花子は大津波が起きる可能性に言及した。
- b. (?)太郎は大地震の起きる可能性に言及し、花子は大津波が起きる可能性に言及した。
- c. *太郎は大地震の起きるという可能性に言及し、花子は大津波が起きるという可能性に言及した。
- d. ??太郎は大地震の起きるという可能性に言及し、花子は大津波が起きるという可能性に言及した。

まず、(15a)のガ／ノ交替の例に RNR を適用したのが(15b)である。RNR の前件部分は後件部分との同一性が要求されるので、格がノとガで異なっている分やや不自然に響くが容認度はそれほど悪くない。(15c)は Complementizer Blocking Effect によって容認度が落ちているが、(15d)に示すように、「という」を含む部分を RNR によって削除すると容認度が上がるように感じられる。微妙な容認度の判定を含むためさらなる検証が必要であるが、もしこの対比が成り立つのであれば、格交替と RNR の組み合わせにおいても island repair と同じように音形の有無で容認度が異なる現象が存在するということになる。

5. 日本語の RNR のさらなる記述

本論文で取り上げた日本語の RNR はその他にも形態統語論的に興味深い性質を持っており、また英語等の他言語と異なる振る舞いを見せる場合もある。本節では日本語の RNR についてさらに記述の整理を行う。

まず他言語の RNR との違いとして、英語やドイツ語では複合語の一部であっても削除が可能であるが、日本語では複合述語の一部を削除できないということが挙げられる。

(16) 英語

- a. Your theory undergenerates and my theory overgenerates. (Wilder (1997): 83)

ドイツ語

- b. Philip säte Frühlings~~blumen~~ und Herbstblumen.

Philip sowed springtime ~~flower~~ and autumn flower.

(Féry and Hartmann (2005): 73)

日本語

- c. *太郎はケーキを食べ ~~始め~~、花子はワインを飲み始めた。

(16c)に示すように、比較的各構成要素が統語的に独立性の高い統語的複合動詞（影山(1993)）であってもその一部を削除する解釈では容認度が低い。

さらに、各種接続マーカ―や補文をとると考えられる述語も削除することは難しい。(17)のいずれの例も、話者によっては筆者の判断より容認度が高いものがあるかもしれないが述語まで含めて削除した場合との差は明らかであろう。

(17) 複合述語（モダリティ述語など）

- a. *太郎は走り ~~たくて~~、花子は歩きたかった。

(cf. 太郎は午前中に ~~走りたくて~~、花子は夕方走りたかった。)

- b. *本当は、部長が挨拶をする ~~はずで~~、課長が司会をするはずだった。

(cf. 本当は、部長が挨拶を ~~するはずで~~、課長が司会をするはずだった。)

- c. *太郎は自分の論文を誉め ~~られ~~、花子は自分の論文を批判された。

(cf. 太郎は論文を ~~誉められ~~、花子は口頭発表を誉められた。)

接続マーカ―

- d. *太郎はご飯を食べ ~~ながらテレビを見~~、

花子は音楽を聴きながらテレビを見た。

(cf. 太郎はご飯を食べながら ~~テレビを見~~、

花子は音楽を聴きながらテレビを見た。)

- e. *太郎はセクハラをした ~~ためにクビになり~~、

花子は横領がばれたためにクビになった。

(cf. 太郎はセクハラを ~~見つけたために~~、

花子は横領を見つけたためにクビになった。)

RNR はある特定の音韻的単位には基本的に介入できないことが知られている (Wilder (1997): 86-87)。日本語の複合述語が一つの韻律語 (Prosodic Word) を形成すると考えると、日本語では RNR が韻律語に介入できないとすることで上記の現象の多くは説明できる。しかし、「ため」などはその補文に過去の「た」を含むことができ、音韻的にも独立しているのでこの分析を適用することは難しい。

ここで、RNR は minor phrase (Poser (1984)) に介入できないという仮説を提案したい。その仮説を支持する証拠の 1 つとして下記のような現象が挙げられる。

(18) 太郎は前大統領派で、花子は現大統領派だ。

Poser (1980) が “Aoyagi prefix” と呼んだ「前」「現」などの minor phrase を保持するタイプの接頭辞であれば、(18) で見るようにその基体のみの削除が可能である。これはこの種の接辞と基体の間に minor phrase の境界があるので RNR が基体部分だけに介入することが可能であると考えることができる。

補文の述語と「ため」の前に minor phrase の境界があるかどうかについてはさらに詳しい検討が必要である。(19) に見るように最大の minor phrase に付加される間投用法の「ね」が述語と「ため」の間に生起できないことを考えると、同様の分析が適用できる可能性がある。

(19) 太郎は(ね)セクハラを(ね)した(*ね)ために(ね)クビに(ね)なって(ね)、…

ここまでの現象は日本語の RNR が音韻環境に敏感であり PF 削除分析が有効であることを示唆するが、一方でそれに疑問を投げかけるものとして助詞が絡む現象が挙げられる。

(20) a. ??~*太郎は父親には ~~プレゼント~~ をあげ、

次郎も母親にはプレゼントをあげた。

b. 太郎は父親にはネクタイを ~~あげ~~、次郎も母親にはハンカチをあげた。

c. 太郎は父親に ~~プレゼント~~ をあげ、次郎も母親にはプレゼントをあげた。

(20a) に示すように、ハ句が RNR の前件の右端に現れると容認度が落ちる。これがハ句と RNR の相性という単純な問題でないことは、(20b) のようにハ句が前件の右端

以外の場所に生起する場合や(20c)のように前件だけから「は」を取り除いた場合は容認度が落ちないことから分かる。単純な PF 削除分析ではこれらの対比を説明することはできない。

また、(21)に示すように他のとりたて詞はハと違い RNR の前件の右端に出られるものが多いので、とりたて詞 (focus particle) であることが(20a)の容認度の要因であるとも考えにくい。

- (21) a. 太郎はビール も (累加) / さえ ~~飲めず~~、
花子は梅酒 も / さえ 飲めなかった。
b. 太郎は父親にだけ ~~プレゼントをあげ~~、
次郎は母親にだけプレゼントをあげた。
c. 太郎は次郎こそ ~~会長にふさわしいと思っ~~ていて、
次郎は太郎こそ会長にふさわしいと思っっている。
d. 太郎はりんごばかり ~~毎日食べて~~いて、花子はなしばかり毎日食べている。

これらの助詞に関する振る舞いについては、RNR そのものが対比焦点 (contrastive focus)を表す (Hartman (2000), Ha (2008), cf. Wilder (1997)) こととの関連が推測されるが、詳しい分析については今後の課題としたい。

また、この RNR においては通常省略が不可能な助詞も現れなくて良いという現象が観察される。(22a)に示すように「から」は「を」等とは異なり通常は脱落しない助詞であるが、(22b)のように RNR ではこの要素を先頭に削除することができる。

- (22) a. 太郎は 先生*(から) 辞書をもらった。
b. 太郎は先生 から辞書をもらい、花子は父親から辞書をもらった。

このように RNR による助詞の削除は強力であるが、等位や並列構造を形成する助詞に一部削除が不可能なものが観察される。

容認する話者も存在するが、(23a)のように「と」を含めて削除した場合(23b)と同じような解釈を得ることは難しく、太郎はコーヒーのみを注文したという解釈になるように思われる。

- (23) a. *太郎はコーヒーとケーキを注文し、花子は紅茶とケーキを注文した。

(→太郎はコーヒーを注文し、花子は紅茶とケーキを注文した。)

b. ?太郎はコーヒーと~~ケーキ~~を注文し、花子は紅茶とケーキを注文した。

また、(24)に示すように、「や」「か」では助詞が現れても現れなくてもそれらを含む部分を削除したものとしての解釈においては容認度が著しく低くなるようである。

(24) a. *太郎はリンゴ~~やなし~~が好きで、花子はイチゴやキウイが好きだ。

b. *太郎はリンゴ~~やなし~~が好きで、花子はイチゴやキウイが好きだ。

c. *太郎はリンゴ~~かなし~~が好きで、花子はイチゴかキウイが好きだ。

d. *太郎はリンゴ~~かなし~~が好きで、花子はイチゴかキウイが好きだ。

これらの現象についても現段階で具体的な分析を提案することはできないが、等位、あるいは並列であることが1つの要因でないかと推察される。

6. おわりに

以上、本論文では現代日本語において項名詞句の音形の有無により容認度に差が出る独立した文法環境が複数あることを示し、それらが日本語におけるゼロ代名詞および削除現象について新たな経験的・理論的課題を投げかけることを明らかにした。

具体的な分析を進めていくと、それぞれの文法環境において別個の要因により音形の具現が難しくなっていることが明らかになる可能性も十分考えられる。たとえば3節でも触れたように、「-方」名詞句内における現象は適切な形態格の付与が不可能なことから説明されるかもしれない。しかし、日本語では格マーカーの脱落が可能な場合があるため、形態格が常に必須かどうかという点について更なる検討が必要である。

island repair 等の研究が進められているとはいえ、音形があることが文法性に影響するという事実は現在の生成統語論(ミニマリスト・プログラム)の枠組みにおいては深刻かつ興味深い問題である。本論文で示したように、この問題を考える上で日本語からも複数の現象を研究対象として提供でき、より多角的な研究につなげることが可能であると考えられる。

また、本論文で様々な特徴・現象について整理を行った日本語の RNR は関連現象まで含めると未開拓な部分が大きい研究対象であり、今後の研究の進展によって形態統語論研究における複数のトピック・問題への貢献が期待できる。

参考文献

- Abe, Yasuaki (1993) "Dethematized subjects and property ascription in Japanese," *The Proceedings of the 1992 Asian Conference on Language, Information and Computation*. pp.132-144.
- Féry, Caroline and Katharina Hartmann (2005) "The focus and prosodic structure of German: Right node raising and gapping," *The Linguistic Review* 22, pp.69-116.
- Ha, Seungwan (2008) *Ellipsis, Right Node Raising, and Across-The-Board Constructions*. Ph.D. dissertation, Boston University.
- Hartman, Katharina (2000) *Right Node Raising and Gapping: Interface Condition on Prosodic Deletion*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Hiraiwa, Ken (2001) "On nominative-genitive conversion," *MITWPL* 39, pp.66-124.
- Hoji, Hajime (1998) "Formal dependency, organization of grammar," *Japanese/Korean Linguistics* 7, pp.649-677.
- 伊藤たかね・杉岡洋子（2002）『語の仕組みと語形成』研究社.
- 影山太郎（1993）『文法と語形成』ひつじ書房.
- 金水敏（1994）「連体修飾の「～タ」について」田窪行則（編）『日本語の名詞修飾表現』, pp.29-65, くろしお出版.
- Matsumoto, Yo (2000) "On the crosslinguistic parameterization of causative predicates: Implications from Japanese and other languages," Miriam Butt and Tracy Holloway King (eds.), *Argument Realization*. pp.135-169. Stanford: CSLI Publications.
- Merchant, Jason (2001) *Syntax of Silence*. Oxford: Oxford University Press.
- Nakao, Chizuru (2009) *Island Repair and Non-repair by PF Strategies*. Ph.D. dissertation, University of Maryland.
- Otani, Kazuyo and John Whitman (1991) "V-Raising and VP-ellipsis," *Linguistic Inquiry* 22, pp.345-358.
- Poser, William J. (1980) "Word-internal phrase boundaries in Japanese," Sharon Inkelas and Draga Zec (eds.), *The Phonology-Syntax Connection*. pp.279-288, Chicago: University Chicago Press.
- Poser, William J. (1984) *The Phonetic and Phonology of Tone and Intonation in Japanese*. Ph.D. dissertation, MIT.
- 田川拓海（2010a）「「方」名詞句と使役文における二重対格制約」『日本語文法』10(1), pp.122-129.

田川拓海 (2010b) 「連体節における状態のタの統語的分析と否定辞の統語的位置」 『KLS 30: Proceedings of the Thirty-Fourth Annual Meeting of The Kansai Linguistic Society』, pp.192-202.

寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』 くろしお出版.

Wilder, Chris (1997) "Some properties of ellipsis in coordination," Artemis Alexiadou and T. Alan Hall (eds.), *Studies on Universal Grammar and Typological Variation*. pp.59-107, Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.

Wilder, Chris (1999) "Right Node Raising and the LCA," *The proceedings of WCCFL 18*. pp.586-598, Cascadilla Press.

Yatabe, Shuichi (2012) "Comparison of the ellipsis-based theory of non-constituent coordination with its alternatives," *Proceedings of the 19th International Conference on Head-Driven Phrase Structure Grammar*. pp.455-474.

たがわ たくみ／人文社会系
(2018年11月15日受理)